人事労務泣き笑い…

第３回：社会保険労務士試験受験へ

㈱田代コンサルティング代表　社会保険労務士　田代英治

●人事部内の年金勉強会

1994 年秋、私の担当はそれまでの採用・教育研修から人事労務に変わりました。他のスタッフの人事異動に伴う担当変えでした。同じ人事課内ではありましたが、また一からのスタートとなってしまいました。早期に営業への復帰を目論んでいた私にとって、この担当変えは誤算でした。これでしばらく人事部にいることになるだろうと覚悟しました。

人事労務担当になってしばらく経ったある日、部内で年金の勉強会が行われました。当時の人事部は、部長以下ほとんどが営業出身者であり、とくに社会保険の知識が不足していました。

そこで、唯一人事部に長く在籍し、社会保険のプロフェッショナルである厚生課長に講師をお願いし、公的年金制度の勉強会を開きました。

当時の私は、人事部に１年半も在籍しながら、国民年金と厚生年金の違いもわからないほど年金については何も知りませんでした。今から考えると本当に恥ずかしいことですが、それでも業務は回っていました。

実際に、講義を受けてみて、年金のしくみはこうなっているのかとよく理解できました。そして、この勉強会を契機に、社会保険や労働法の世界に強い興味を抱くことになりました。

●社会保険労務士試験に挑戦

営業部時代は机で勉強することなどなかった私でしたが、徐々に勉強の面白さを感じ始めました。そして、手始めに、衛生管理者（第２種）の試験を受け、合格。その後、当時の労働省が始めた「ビジネスキャリア制度」の人事分野や労務分野の初級や中級の試験を受けました。通信教育で人事労務分野を勉強し、その分野の試験を受けて、合格するという小さな成功体験を繰り返していました。

年が明けて 1995 年は、前号で書いたとおり、前半は災害対策に追われていましたが、その合間に、社会保険労務士の資格に挑戦すべく、勉強を始めました。これまでと同じように通信教育で勉強し、平日は電車の中と会社の隙間時間にテキストを読み込んでいました。休日は、自宅でまとまった時間勉強したり、資格学校の模試を受けに行ったりしていました。

人事労務の担当者として、はずかしくない実力をつけたい、そしてチョンボの連続で足をひっぱってばかりいた自分に決別し、周りに認められたいという思いで、人事労務の最難関である社会保険労務士の資格に挑戦することを決めました。最初は、試験科目の多さに辟易し、夏の試験日までに間に合うのかと先が読めない状態でしたが、だんだん知識の量も増えていきました。

しかしながら、1995 年の試験では、合格には一歩とどかず涙を飲みました。もし、ここで大差で不合格になっていたら、あっさりあきらめていたかもしれませんが、手が届きそうなとこ

ろまで来ていたがわかりましたので、来年も挑戦しようと思いました。とはいえ、受験勉強を再開したのは、年が明けて1996年になってからでした。

●仕事と試験勉強の両立

1996年は、会社の業績も回復し、1997年に新卒採用を再開するということになりました。私は、採用の担当からは外れていましたが、採用業務を経験したことがあるのは私の他におらず、採用担当者の後輩に色々とアドバイスをしながら、２年ぶりの新卒採用活動を組み立てていきました。

自分の主担当である春の労使交渉（春闘）が終わり、４月に入るとそろそろ採用戦線に突入します。社員に負担をかけさせられないということで、かつて実施していたリクルーター制度はとらず、人事部主導で各地で会社説明会を開催し、母集団の確保に努めました。

２年間のブランクは大きく、学生の中では、当社の知名度は地に落ちていました。それを補うために、後輩と２人で４月後半から６月にかけて全国を回りました。九州から北海道まで出張の連続でした。

私にとって、人事部の仕事の中で最も楽しいのが採用の仕事でしたので、出張は全く苦になりませんでしたが、この時期試験勉強はほとんでできませんでした。

新幹線・飛行機での移動中、説明会や面接の合間のわずかな時間で過去問を解くなど涙ぐましい試験勉強でした。この年、採用活動を頑張ったおかげで、逆風の中、期待以上に質の高い人材を確保することができました。このときの10数名の精鋭は誰一人として脱落せず、全員が中堅社員として世界各国で活躍しています。

総合職の採用活動が終わると、今後は契約社員の採用活動が待っていました。当時、社会保険労務士試験は７月の最終火曜日でした。こんなに忙しいのに、平日の試験など受験できるのか、そんな不安が頭をよぎりました。

それでも何とか試験日に年休を取ることができましたが、２回目の受験は、仕事との両立が困難な状況の中、勉強不足のまま当日の朝を迎えたのでした。